

## 第2．7月26日(火)公式対談(午前10:00～午後12:30)

### 1．舞台は？主役の登場は？

(公式)対談の舞台は、坂和総合法律事務所がある西天満コートビル4階の大会議室。壁には坂和の妻員子によって「熱烈歓迎莫言 作家莫言会談律師坂和章平」と筆で書かれた大きな横断幕が飾られ(写真第2 - )、テーブルの上には莫言分と毛丹青分のレジメと資料が(写真第2 - )。もちろん莫言の小説やその他の関連本もすべて準備されている。とりわけ中国映画約200本を評論した『シネマルーム5』と『シネマルーム17』を莫言は興味深そうに見つめていた(写真第2 - )。当日の録音やビデオ撮影は坂和の息子である宏展弁護士役目だし、今年5月に司法試験が終わり9月の合否発表を待つ娘の奈央子も興味津々の様子で対談を見守っている。最初の挨拶が終わり、昨日と一昨日の神戸、京都での講演の様子が報告された後、いよいよ(公式)対談が開始。

以下、テーマ毎にその詳細を(写真第2 - )。

### 2．どんなテーマで、どんな対談を？

以下、対談の様子をテーマ毎に整理しておく

#### (1)『紅いコーリャン』と張藝謀監督について

坂和：『紅いコーリャン』、『至福のとき』、『故郷の香り』の3本は観たが、莫言文学は読んでいなかった。今回はじめて読んだが非常に面白く感動した。小説『赤い高粱』を読んで映画がより詳しく理解できた。そこで、張藝謀監督と彼のハリウッド進出についてどう思う？

莫言：第5世代監督である張藝謀と陳凱歌のすばらしい作品は、ほとんど80年～90年代につくられた。『HERO』以降は商業主義色を強めた。張藝謀のスタイル、エネルギー、スピリットを表現できた映画は『紅いコーリャン』、『紅夢』、『生きる』の3本と『菊豆』。しかし彼は『あの子を探して』と『初恋のきた道』で転換期を迎えることができた。これによって政治的メッセージを薄め、人間の情を突出させた映画をつくることができた。また最底辺に普通に暮らす普通の人の感情を表現できた。もっとも、そのため社会そのもの、政治体制に対するかつての激しい批判が消えてしまった。

坂和：最新の作品である『サンザシの樹の下で』は？

莫言：おそらく彼はこれを懐かしく思いながら作った。人間の感情を表すことを狙った作品。こういう映画は現在の社会とかけ離れてしまっている。彼の最近の作品はわからない。称えるのか批判なのかはっきりしない。だからつまるところ、張藝謀も陳凱歌も第5世代監督の使命は終わっていると見ている。

#### (2)第6世代監督について

坂和：第6世代監督についてどう思う？

莫言：『南京！南京！』の陸<sup>ルー・チュアン</sup>川<sup>ル</sup>や『プラットホーム』や『長江哀歌』、『四川のうた』の賈<sup>ジャ・ジャンクー</sup>樟<sup>チ</sup>柯<sup>コ</sup>などが第6世代だ。賈<sup>ジャ・ジャンクー</sup>樟<sup>チ</sup>柯<sup>コ</sup>はメッセージ性を持っている。しかし、こういうのは中国では、政府のチェック、検閲が入ってなかなか上映できない。張<sup>チャン・イーモウ</sup>藝<sup>イ</sup>謀<sup>モウ</sup>などはそういうものが問題にならない映画だけつくっているが、第6世代はそういうものにチャレンジしている。

莫言：中国の映画界にはおかしな現象がある。最初映画をつくりはじめた時の作品は社会を批判しようとする。それが検閲を受ける。それをすれすれ、ギリギリまでやっていく。ところがいざ成功してしまうと、控えめになっていく。今、第6世代も第5世代も同じ路線を行っていると思う。第5世代も第6世代も、国際映画祭で脚光を浴びると有名になって本土に戻る。戻っていざ映画をつくろうとすると、今度は有名になっているから当局との戦いを避けて控えめにつくる。まったく同じロジックだ。

莫言：もう1つ理由がある。国際的に有名になると、当局から親しく接してくるようになる。自分の映画をヒットさせるためには当局との戦いは避けるのがベター考える。だから有名になった監督は、時代劇を撮るか、個人の感情、愛情物語を撮る。現代社会に敏感なものは誰も撮ろうとしない。

### (3) 坂和、莫言、毛丹青の年表をもとに、都市問題について

坂和：1) 私は1949年生まれ、莫言は1955年生まれ、毛丹青は1962年生まれ。そこで年表をつくり、その間に起きたことを整理した。莫言は5歳の時に文化大革命があって、1976年21歳の時、人民解放軍に入り85年30歳から作家活動を始めた。坂和にとって大きな転機は1967年から70年代にかけての大学紛争だ。弁護士になって公害裁判をやった。弁護士としては、あれだけ公害が起きて中国ではなぜそれが社会問題にならないのかという感じがするが、それは政治問題になってしまうからここではテーマにしない。弁護士として公害裁判をやり、その後もっと大きな問題として環境をやり、それから都市問題に移った。84年から今日まで都市問題をテーマにいろいろと本を書いている。

2) 他方、00年からホームページをつくり、映画評論を始めた。約10年間で約2000本の映画を観て『シネマルーム』を1から26まで出版した。そこで、都市問題について聞きたい。『胡同の理髪師』、『上海家族』や『ハリウッド ホンコン』、『シヨンヤンの酒家』などは中国の

都市問題を扱っている。中国でもそれは大テーマのはずだ。古い胡同を取り壊して、高層ビルが次々とできる。そういうまちづくり、都市計画の問題に興味を持っている。それが映画でも描かれている。浙江省の杭州も豊かな地域になり、田畑を売って家を建てている。莫言の田舎の高密度の農民もどう変わっていくか興味を持っている。

莫言：1) 中国でも突出した矛盾の1つが、ほかでもない都市建設、都市計画だ。北京でも上海でも、小さく言えば私の故郷でも立退きの話があちこちで起こっている。自分の故郷も小さな町だったのに、この10年ほどで数倍に広がった。土地を広げることがなぜできるのかと言うと、農業用地を買収してビルを建てるという方法をとっているからだ。開発当初はわりと庶民の言うとおりに対応してくれた。ところが近年は、立ち退きを実行するのが難しくなっている。毎回立ち退き作業の中で誰かが必ず最後まで抵抗する。こういった最後まで戦った人たちが、無抵抗ですんなり受け入れた人たちと比べて目立つようになり、それが「モデル」になった。なぜかと言うと、最後まで抵抗すればするほど多くお金がもらえるからだ。それが噂になって広がった。私は中国の、病気になったかのようなこのような急速な発展はずっと前から批判してきたつもり。

2) 私は農民の家に生まれた農民の出身だから、豊かな土が冷たいコンクリートになっていったのを見るたびに心が痛む。人間にとって何が重要か。それは食料であり、食料にとって何が重要かといえば土地だ。中国はこれだけの人口を抱えている。もし、食料や土地に問題があれば大変なことになってしまう。

3) もう1つ私が批判するのは、中国の急速な発展を生んだ都市開発が、裏では大きな利益を生み出す装置になっている。地方政府は、別名「土地買収政府」「土地販売政府」と呼ばれている。中国では大変なお金持ちが生まれてくる。そのほとんどは都市開発を手がける不動産業者に限られる。これは非常におかしなこと。この中に、不正、腐敗、癒着の構造がある。最近では、政府がとても画素数の高い写真の撮れる人工衛生を使ってコントロールしようとしている。今までは密かにやられていたが、今では先月まで農業用地だったところにビルが並んでいたりするとすぐに発覚する。

4) 最近非常に滑稽な事件が起きた。それは湖南省の地方政府が、人工衛生写真をごまかして農業用地にみせるために、コンクリートの上に土をばらまいて、ニセの緑を飾りつけた。こういったものは、昔は知られていなかったかも知れない。しかし、今ではツイッターなどのツールが

出てきて知られるようになった。こういうのも文学にとって面白いネタになる。

坂和：『蛙鳴』で一人っ子政策のタブーに大胆に切り込んだように、土地問題、立ち退き問題についても莫言流の視点でぜひ何か作品を書いてほしい。

莫言：それが『転生夢現』の後半で、ただ一人の農民藍臉が土地を守ろうとする話として登場する。自分のためにお墓までつくって、最後はそこに入ろうとする。

坂和：これはあくまで毛沢東時代の矛盾点だ。

#### (4) 作家莫言との対談テーマ その1にもとづき、作家VS弁護士のフィールドの異同について

坂和：弁護士は法律を勉強したり、相手の書面を批判したり、こういう勉強が必要。作家の場合は何の勉強をすればいいのか。全部頭の中の作業なのか。

莫言：作家は何より想像力。弁護士は出所がある証拠にもとづいて話をしないといけない。中国では「事実を根拠にして法律をはかる」という。作家はそれに対してまったく正反対で自由自在。弁護士にはその自由がない。これは我々の職業としての一番大きな違いだ。

莫言：1)しかし、想像力のある弁護士は、想像力のない弁護士より優れていると思う。いろんな事件があるが、その連結部分をどうつなげていくかはある種の想像力だ。法律というのは、すべてが透き通っている、自明のものではなく、法律自体が矛盾していることもときどきある。おそらく法律の間にはスキマみたいなものが空いているかも知れない。そこを最大限引き出して、依頼人の利益に結びつけていくか。そこに想像力が必要だと思う。

2)もう1つ、我々の職業に似ているところがある。それは「言葉」、言語の表現者であるということ。作家は、言葉を使って読者に訴えかけて惹きつける。弁護士は言葉を使っていかに依頼人を有利な立場に立たせるか。武器は同じ。法廷には何度も立ったが、法廷に立つ弁護士の演説にはすばらしいものがいっぱいある。弁護士の言葉というのは、法廷において、たとえば裁判員、裁判長に対して、心を動かすような言葉を発しなくてはならない。それから傍聴席の全員に対しても。アメリカの陪審裁判などでは、とくに弁護士の表現振りというのはきわめて重視される。興味深い例として、O.J. シンプソンの裁判がある。その弁護士の演説振りには驚かされた。弁護士と作家は同じ武器を持っている。

坂和：映画でも法廷サスペンスは多い。アメリカでは『十二人の怒れる男』という陪審映画の最高傑作がある。日本でも「法廷もの」は多い。

莫言：『人間の証明』という映画がある。もう1つ感心したのは、弁護士という

名前がすばらしい。律師より弁護士という呼び方の方がすばらしい。  
坂和：弁護士だけど日本はほとんど書面審理だから、しゃべらない弁護士が多い。

莫言：書くのは作家と同じ。文法も間違えてはいけない。色もつけないといけない。裁判長もみんな感情があるから。

莫言：死んだ人をおしゃべりだけで生き返らせることができる。これは弁護士しかできない。死刑の人を一生懸命弁護して、無罪になったこともある。坂和先生はそれができる。

#### (5) 作家の創造力について

坂和：作家は創造したものを書くのが仕事だから、本来孤独か？

莫言：一概には言えない。そのモードに取りかかったら、作品の中の人物と暮らすことができる。何日間も部屋に閉じこもっているが、その間ずっと登場人物と対話しているから楽しい。

坂和：私の知っている作家はみんなしゃべると面白い。しかし日本の弁護士は書面はちゃんとしていても、しゃべると駄目な人が多い。

莫言：弁護士はいろんな人と接しないけれど、作家は生活の中で接する。

#### (6) 印税問題についての話

坂和：吉田富夫が『中国幻影』の中で「莫言さんの脱税事件」を書いているが、呼び出されて、どんな仕事をするのかを聞かれたことは？

莫言：ある。わかったのは、中国、韓国、日本では税務の情報交換があるということ。税務署に行くと日本でも本を出したでしょう、どの本ですかと聞かれて、これですと言った。それについて税金を収めたかと聞かれて、源泉徴収で出版社の説明によって全部出したと答えたが、その後書類などを求められた。また自分の銀行口座に入金した証明を出せと言われた。中国では印税が13%、日本では10%、その差3%を税務署に出した。それをきっかけに勉強するようになった。日本だけではなく外国のいろんな印税規定も。研究すればするほど向こうが間違っていると気付いた。大したお金ではないから、面倒なことはやめようと思った。もしその時弁護士が付いてくれていたら、すべて解決できたのではないか(笑い)。

#### (7) 別レジメA 弁護士坂和が影響を受けたこんな本、あんな本にもとづき、各種小説について

坂和：川端康成が書いた『雪国』という小説の「黒く逞しい秋田犬がその踏石に乗って、長いこと湯を舐めていた。」と書いていたことに莫言はなるほどこのように表現すれば小説は書けるんだと開眼したとのこと。そこで莫言は日本の作家からどんな影響を受けたか。

莫言：三島由紀夫が好き。『金閣寺』は有名。1988年に読んだ。作家デビュー

ーしてから読んだ。また、谷崎潤一郎が好き。『卍』の老人が若い女を覗き見る臨場感あふれる描写に憧れる。歪んだ心。もちろん大江健三郎の初期の小説も読んだ。

坂和：『伊豆の踊子』を読んで、現地に行きたいとか、その踊り子がどんなものか見てみたいと思わないか。頭の中だけでどの辺までイメージできるのか。またはどこまで理解できるのか。

莫言：もちろん行きたい。好きな小説なら、現地がどうなっているのかを見たい。実際にいろいろ行った。

坂和：五木寛之はどうか。

莫言：読んだことがない。エッセイの方は詳しい。

坂和：『青春の門』が面白い。主人公が九州の炭鉱町から東京に出て大学に入り学生運動をする中で成長していく話。自分が小学・中学・高校で読んだ小説は基本的に身近なもので、自分が経験できる、イメージできるものが多い。だから私は自分を同化させながら、たくさんの小説を読んだ。私の時代はそれができた。しかし、莫言さんの小学生時代はそんなに本が多くないから、『三国志演義』などで想像を膨らませていた。

坂和：作家は本来読者。読者でなければならぬ。作家になれば、その次の読み方がずいぶん変わる。

坂和：小説を読んで、その影響を受ける。青春時代はそれがものすごくある。孤独や想像という世界と、いっぱい本を読んで学ぶということが莫言先生は両立しているのか。それとも読む本は少なかったが、頭の中の想像がいっぱいあるのか、そこら辺を知りたい。

莫言：作家になって本をたくさん読むようになった。しかし、本をたくさん読んで、想像力を豊かにするわけにはいかない。大切なことは、その記憶を思い起こさせること。「呼醒」ということ。典型的なのは、『雪国』の白い犬を見た瞬間、自分のふるさとの犬の様子を思い出したりすることだ。

坂和：作家になるための勉強は、人によって違う。一生懸命人の本を読んで、それを参考にすることが多い。それで一流になれるのかどうかは別として、そういう勉強は必要。

莫言：大量に読まなくていい。選んで読む。好きになった作品を何回も繰り返し読むのが自分の特徴。作家の現場を想像してみたい。本を書くときには必ず何冊も本を側に置いている。それは、自分のお気に入りのものだ。

坂和：日本には檀一雄などの「無頼作家」がいる。作家になると、名士になって、有名になって、格好良く、銀座に行って毎日飲んでいるというイメージがある。作家にとってはそれも取材や勉強だ。

莫言：昔はそうだったかもしれない。今日発達しているようなテレビやネットはなかった。今はそういうところには映画スターがたくさんいて、作家

は密かにどこかで本を書いている。

坂和：落語家も同じ。桂春団治は遊びと仕事がイコールだったらいい。遊びも仕事だし、遊びも勉強だ。

莫言：私にはできない。嫁が厳しい。門限もあって、夜9時前には帰らないといけない(笑い)。

坂和：私にとっての理想はまさに遊びと仕事と勉強が三位一体になること。弁護士の仕事をやっていれば収入はそれなりにあるが、遊びがないから面白くない。知識を切り売りするだけの仕事は面白くない。

莫言：自分の小説はほとんど記憶にもとづくもの。夜の遊びの生活は書いたことがない。よく知らないからだ。今日の、坂和先生の話の家内に伝える。文学のために、ちょっと遊ばせてくださいと言ってみる(笑い)。ところで、弁護士は作家になる人も多い。弁護士が実際に現場に携わってきたものが、小説の素材になるからだ。

坂和：私もそれはやりたい。

莫言：今すでに始めている。

坂和：しかし弁護士の仕事の方が楽。映画評論は儲かればいいが、儲からない(笑い)。

莫言：今、文学でお金を儲けるのは難しい。しかし法律を使って犯罪物語を書けば十分儲けられる。例えば、日本の松本清張とか。

#### (8) 中国の現代作家について

坂和：『上海ベイビー』、『衛慧みたいにクレイジー』の衛慧や『裏切りの夏』の虹影など中国の70、80年代の現代作家は一発屋で、後は続かない。最初の短編だけで終わり、作家としての寿命がどこまで続くかはわからない。莫言さんもそのことを感じているはず。映画は第5世代から第6世代へとそれなりに引き継がれているが、作家の質の低下を感じているのかどうか、を聞きたい。

莫言：今70、80年代生まれの人を一発屋と言わなくても、書き続けるとは思わない。中国では誘惑が多すぎる。チャンス也多すぎる。文学よりいくらかでも面白いものがある。作品を1つ、2つ書けば有名になり、それから文学より面白いことを始める。もう1つは、若者は社会に対する意識があまりない。個人の生活の体験が乏しくて、苦しめられた経験もない。人間の運命とか国の運命、社会問題とかあまり考えなくなった。彼らは個人の体験を書き出してしまうと、もはや書こうとするものがなくなってしまう。

坂和：『上海ベイビー』は確かに刺激的。読めばすごく面白いが、それだけのもの。

莫言：それが典型的な形。

( 9 ) 作家莫言との対談テーマ その2にもとづき、孤独と飢えについて

坂和：私は松山の田舎で生まれた。父が厳格だったこともあり、自分の世界にこもり、ラジオばかり聞いていた。受験勉強して大学に入って、やっと自由になった。孤独の中での勉強が絶対に必要だが、今の若者はなかなかできなくなっている。孤独についてどのように伝えるか、どう教えるかが大切だ。今の孤独は、他の人に対して無関心という孤独。しかし私の時代は、孤独だから何かを求めるといふ孤独だった。例えば、友達。そして欲。食欲、性欲など。

莫言：今の若者は非常に恵まれている。特に中国では一人っ子。でも、あまりにそれが超えてしまうと子供によくない。今の子供には苦痛がある。幼稚園から大学まで受験などいろいろ背負わなければならない。その子供たちも、孤独感がある。人混みの中で孤独感を感じている。私たちの時代とは違う。

( 10 ) 日本の若者をどう思うか

坂和：一般的な質問になるが、最後に日本の若者についてどう思うか。中国の若者についてどう思うか。何を期待しているか。

莫言：我々からもっと学ぶべきだ。

### 3 . 対談終了後の記念撮影など

( 1 ) 約2時間にわたる充実した対談が終了した後、横断幕をバックに莫言と私の記念撮影を。( 写真第2 - )

( 2 ) 莫言は「書の達人」だから、一筆書いてもらわない手はない。そんな毛丹青のアドバイスを受けて、厚かましくそれを「おねだり」すると、莫言は快く承知してくれた。しばらく文章を考えた後「和風 坂和章平先生是位奇人」と見事な書を書いてくれた( 写真第2 - )。ちなみに、ここに書かれた「奇人」とはどんな意味？

( 3 ) 私のおねだりは更に続き、私が購入した莫言の小説のすべてにサインのおねだりを。快くこれに応じてくれた莫言は、サインペンを持って1冊ずつ丁寧にサインを( 写真第2 - )。

以上